

3. 歴史的環境

(1) 旧石器時代

球磨地域は、熊本県下でも有数の旧石器時代の遺跡の密集地帯として知られている。特に九州縦貫自動車道関連工事に伴う発掘調査が行われた 1980 年代後半以降、調査報告書の刊行とともに全国的に注目されることとなった。

本町では、国道 219 号から南部ふるさと農道を多良木町方面に向かい、潮神社(うしおじんじゃ)の周辺が潮山・クノ原遺跡となっている。

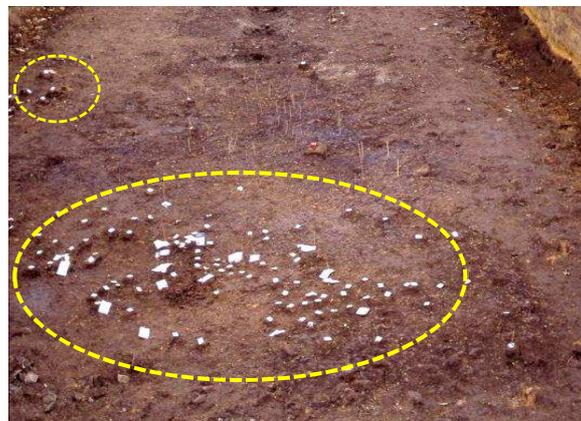
当時の農道建設に伴い、平成 8 年度(1996)から 9 年度(1997)にかけて行われた熊本県による調査において、石器や石材の集中部(ブロック)が認められ、それらが環状に分布しており、当時では九州初となったいわゆる「環状ブロック」を検出した。

遺跡の環状ブロックは直径約 20m で、全国的にみると中規模なものと言えるが、旧石器時代に少人数のグループで移動生活を行っていた人類が一時的に集合している状況から、大型動物等を狙った大人数による大規模狩猟や解体を行った痕跡を示すものと考えられている。

また、恒常的な「ムラ」が形成される以前の一時的な集合の場を開いた例とみなし、共同社会の一形態として位置付ける考え方もあるが、こうした痕跡を確認できたことは、本町でも古くから人々の生活が営まれていたことを示すひとつの証左と見ることができる。



潮山・クノ原遺跡空中写真
(熊本県教育委員会所蔵のものに加筆)



クノ原遺跡より出土した集中部
(熊本県教育委員会所蔵のものに加筆)

(2) 縄文～古墳時代

球磨地域における縄文時代の特徴として、縄文時代草創期から早期にかけての遺跡確認数の多さを挙げることができる。

その要因としてこの地域での火山灰の発達、特に鍵層となる鬼界(きかい)アカホヤ火山灰(K-Ah)の堆積という条件により、下位の遺跡の保存状態が良好であったことが考えられる。

この時代の遺跡としては、本町では潮山・クノ原遺跡から主に縄文早期以降の石器が出土しており、石材としては、黒曜石、安山岩、チャート、黒色珪質頁岩(こくしょくけいしつげつがん)が使用されていたことがわかっている。

このうち黒色珪質頁岩は、遺跡の北側を流れる大谷川に産出することから、比較的容易に入手できたと考えられる。

また、大谷川には鉱泉が存在し、現在の鉱泉地点は潮溜池の中にあるため確認できないものの、戦前頃までは鉱泉を沸かした湯治場として賑わいをみせていたとされる。

大谷川の北側には宮崎県日南市にある鵜戸神宮(うどじんぐう)の分社として潮神社があり、この鉱泉との関係があると言い伝えられており、当時の人々はこの鉱泉の効能を知ってこの地に来ていたことも考えられる。

なお、昭和60年(1985)には、溜池を挟んだ対岸に対となる塞(さい)神社が長崎県壱岐市から分祀されている。

ほかに、米山(こめのやま)遺跡からは宮崎県を中心に出土する後期の綾(あや)式土器が出土し、東方(ひがしかた)遺跡では石製の玦状(けつじょう)耳飾が出土しており、長尾(ながお)、下辻(しもつじ)、浅鹿野(あさかの)の各遺跡も縄文時代の遺跡として知られている。



大谷川より産出する黒色珪質頁岩



東方遺跡より出土した玦状耳飾と勾玉

弥生時代は、下里（しもざと）、上ノ段（うえのだん）、下辻の各遺跡があり、これらの遺跡では、戦前より打製石鏃（だせいせきぞく）をはじめとした多くの遺物が出土していたといわれている。

古墳時代に入ると、町内でも浅鹿野や東方に古墳が造られていったが、石室などは後世の耕作や開発ですでに破壊され、詳しい構造などは分かっていない。

（ 3 ）奈良～平安時代

奈良時代の球磨郡では、六郷（久米（くめ）、球磨、人吉、東村（ひがしむら）、西村（にしむら）、千脱（ちぬぎ））がおかれ、本町域は久米郷に含まれていたと推測される。

神仏の造像活動が全国的に盛んとなった平安時代には、球磨地域もその流れに入り、本町では下里地区に位置する御大師堂の毘沙門天立像や、馬場（ばば）の八勝寺（はっしょうじ）阿弥陀堂の天部形立像（てんぶぎょうりつぞう）が平安後期の作として知られている。

（ 4 ）鎌倉時代

元暦2年（1185）、壇ノ浦の戦いで平家が滅びると、最後の拠点であった九州は幕府の預かりとなり、それ迄の球磨御領は再編され、蓮華王院領の人吉荘（下球磨）、関東御領（中球磨）、公領（上球磨）となった。

後に上球磨では相良頼景（さがらよりかげ）が多良木を領地とし、子の長頼（ながより）は人吉荘地頭職となった。こうした相良氏の台頭は、それまで平河・須恵・久米といった在地の豪族が勢力を誇っていた球磨地域にも中世の波が訪れた事を示している。

本町の歴史的環境を語るうえで鎌倉時代は重要な時代のひとつであり、その特徴として、後に江戸時代に新田開発によって成立する「東方村」（ひがしかたむら）となる現在の馬場・瀬戸口（せとぐち）・辻地区を中心とした中世仏教文化の興隆を挙げることができる。

また、この地区は現在の多良木町久米と境を接しているが、相良氏の人吉荘補任（ぶにん）以前から東方の一方を支配していたとされる久米氏の建立によると推定される堂宇があり、本町では現在「城泉寺（浄心寺）」（じょうせんじ）の呼び名で親しまれている明導寺阿弥陀堂、宝陀寺（ほうだじ）観音堂、八勝寺阿弥陀堂がこれにあたる。

とりわけ明導寺阿弥陀堂は、堂内の阿弥陀三尊像が慶派(けいは)の流れを汲む仏師の手によるとの指摘もあり、本堂の願主である「浄心」(じょうしん)と都とのつながりを覗わせるものといえる。



明導寺阿弥陀堂



木造阿弥陀如来及両脇侍像

こうした領内の堂宇は、江戸時代になると人吉藩直轄の修理(公儀修理)をはじめ、村(村修理)や地域(所修理)といった単位で修繕が行われており、こうした事業により、県内に現存する古社寺建築で国宝、重要文化財、県指定の文化財となっている 8 割以上が人吉球磨地域に所在するという全国的にも珍しい地域となっている。

古くは人吉藩を中心として、地域全体でこうした保護に取り組んでいった結果、平成 27 年(2015)に認定された「日本遺産」のストーリーでもある「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化 日本でもっとも豊かな隠れ里」と形容される特色ある文化圏を形成する一因となり、明導寺阿弥陀堂 もその構成文化財として、保存と活用の両面で注目される文化財である。

明導寺阿弥陀堂は鎌倉時代に在地の久米氏が建立したといわれている。

(5) 南北朝・室町～安土桃山時代

この時期の相良氏は、球磨郡を中心に葦北(あしきた)郡や八代(やつしろ)郡へ支配地域を広げ、のちに薩摩の島津氏や肥後八代郡の名和(なわ)氏との争いを展開するようになる。

特に名和氏とは、八代郡豊福(とよふく)庄(現在の宇城市松橋町)にあった豊福城をめぐる抗争があり、この城をめぐる約 80 年間で合計 9 回にわたり所有権を奪い合っている

文化面では鎌倉時代に続いて仏教文化が栄えた時代であり、本町では八勝寺阿弥陀堂が再興されたほか、天正年間には御大師堂も建立された。



八勝寺阿弥陀堂



御大師堂

また、人吉城の支城であった湯前城では、球磨地域を統治した相良氏に係わるできごとが起きた。

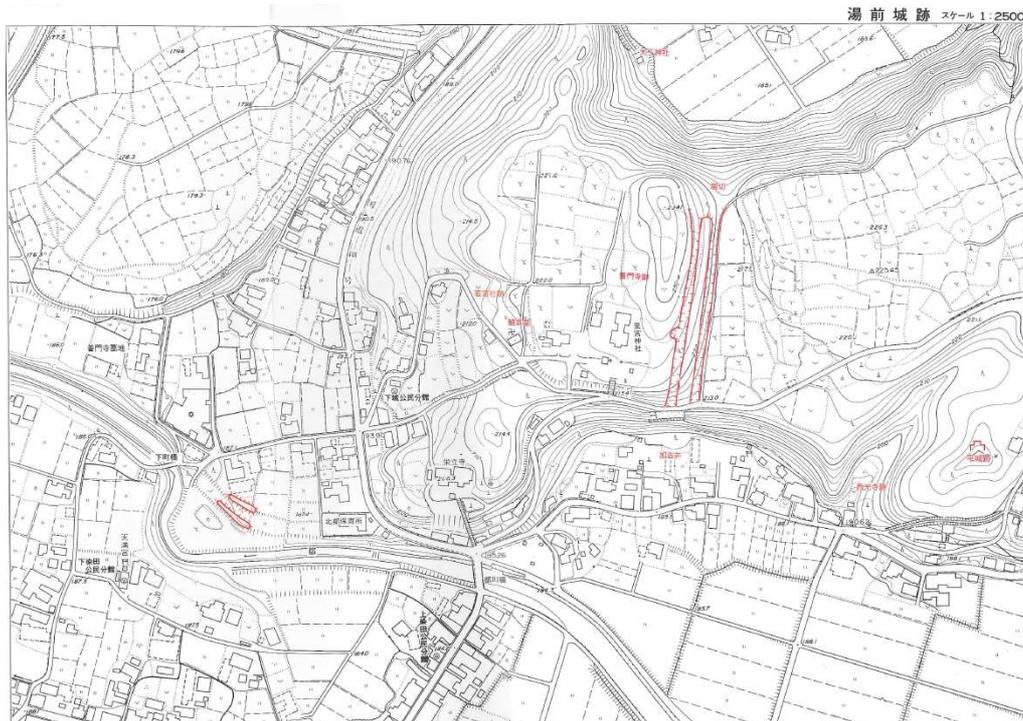
永禄2年(1559)、相良氏第18代義陽(よしひ)の重臣丸目頼美(まるめよりよし)と東長兄(ひがしながえ)の対立にはじまり、現在の多良木町付近で、郡内を二分して戦った獺野原(うそのぼる)合戦に関連し、当時湯前城を居城としていた東直政(ひがしなおまさ)は丸目方につき敗れ自刃し、湯前城も落城することとなった。

後に、城主として東能登(ひがしのと)が一武城(いちぶじょう)から移り、竹下監物(たけしたけんもつ)が地頭に任じられたが、監物親子は文禄3年(1594)、当時領内で勢力のあった犬童(相良)清兵衛(いんどうせいべえ)の一派を滅ぼそうと画策したことが発覚し、切腹を命じられたが、600名の兵と湯前城に籠城抗戦したが、最後は湯前城で自刃しており、この対立は後に近世まで続く藩内抗争の主因となつたといわれている。

その後も湯前城は、『慶長国絵図』に本城(人吉城)、大畑城(おこばじょう)と共に記されるなど、元和元年(1615)の一国一城令により大畑城と共に破却されるまで人吉城の支城として、相良氏にとって重要な球磨の拠点であったことを示している。

(6) 江戸時代

関ヶ原の合戦で当初西軍につき、のちに東軍に内応したことで所領を安堵された相良氏は、薩摩藩とよく似た行政機構をとっていた。その1つが外城制で、領内には14の外城があり、それぞれに数人の家臣が居住し領地と領民の支配を行っていた。



湯前城跡図 出典『湯前の地名と文化財』

また、厳格な兵農分離がなされておらず、半農半兵の無給郷士が人口の約3分の1を占めており、キリシタン禁制とともに浄土真宗本願寺派禁制を厳守していたことも薩摩藩と同じである。

藩財政については、初期には新田開発に力を注ぎ、宝永年間には2万1000石の新田が開発され、藩財政の向上とともに、現代に続く独自の焼酎文化成立に寄与したといわれている。

この新田開発の中で造られたのが、元禄9年(1696)藩士高橋政重(たかはしまさしげ)によって開削され、現在の湯前町から多良木町、あさぎり町、錦町へと流れ至る幸野溝(こうのみぞ)である。

日本三急流の一つに数えられる球磨川は、舟の遡行が不可能と考えられていたが、商人林正盛（はやしまさもり）が寛文5年（1665）に河川改修工事を完成させ、これにより河口の八代までの水路が確保され、産物の搬出入が容易になった。

これに伴い、熊本藩細川家の許可を得て八代に舟場を設けると、球磨と八代間の物流が球磨川で行われるようになっていった。

こうした新田開発と球磨川の水運は、球磨地域を熊本県内有数の農業地域へと発展させる大きな要因となっている。

（7）明治以降

幕末の慶応元年（1865）勤王派と洋式派の対立から起こった騒動（丑歳（うしのとし）騒動）により藩内の改革が後手に回り、目立った活躍がないまま明治維新を迎えた人吉藩は、明治2年（1869）の版籍奉還で相良氏による支配が終わり、明治4年（1871）の廃藩置県により人吉県となった。

その後、八代県、白川県を経て熊本県に編入され、相良氏は明治2年（1869）に華族に列し、明治17年（1884）子爵となった。

当時の湯前は湯山と組合村を組織していたが、明治22年（1889）の町村制施行に伴い、湯山と分村し「湯前村」となり、次いで昭和12年（1937）の町制施行によって「湯前町」となり現在まで続いている。

明治10年（1877）におきた西南戦争では、県内各地で戦闘が行われ、本町でも現在の浅鹿野区に官軍の本営がおかれ、旧東方村周辺に槻木方面部隊の司令部もおかれた。

また、町南側の山には尾根伝いに塹壕（ざんごう）が築かれ、幸野（水上村）との境でも撃ち合いがあったとされており、湯前も戦場となっていたことを物語っている。

一方、交通に目を向けると、古来より球磨川の水運や尾根伝いのルート、各地を結ぶ街道などが交易に利用され、湯前も交通の要衝として古くから知られていたが、大正13年（1924）3月30日の湯前線（人吉 湯前間）開通は当地における人と物の交流を大きく変化させた。

湯前線は、当初多良木を終点とする計画であったが、湯前では当時から基幹産業としての林業が盛んであり、その木材集積地として湯前が適していたことや県会議員であった田代離三（たしろりぞう）等の働きかけもあり、湯前まで延伸されることとなった。

その後、現在の湯前駅東側に旧営林署の原木材木集積所が開設され、周辺には製材所や旅館などが建ち並び、昭和 49 年（1974）に貨物営業が廃止となるまで、木材輸送の主力として運転を続け、蒸気機関車が黒煙を吐きながら走る姿が日常の光景となっていた。

湯前線は、昭和 62（1987）の国鉄民営化、平成元年（1989）のくま川鉄道移管を経て、木材輸送路線としての役目は終えたが、現在も高校生の通学など沿線住民の生活の足として運行を続けている。



湯前駅本屋（昭和 30 年代）



盆踊りで賑わっていた駅前（昭和 50 年代）



現在の湯前駅本屋



現在のくま川鉄道
列車は観光列車田園シンフォニー

湯前町にゆかりのある人物

・相良 義陽 (さがら よしひ)
天文 13 年 (1544) - 天正 9 年 (1581)
相良氏第 18 代当主



初名頼房で、後に將軍足利義輝の偏諱を受け義陽とした。12 才で家督を継ぎ人吉城主となる。永禄 2 年 (1559) 人吉奉行であった東長兄と丸目頼美の不和から発展した瀬野原合戦で長兄方に擁され勝利。

さらに薩摩 (大口) や天草方面にもたびたび出兵した。天正 9 年、島津義久による水俣城包囲で葦北郡を割譲し阿蘇氏攻めに加わる。その際、盟友で阿蘇氏の軍師でもあった御船 (みふね) 城主甲斐宗運 (かいそううん) に響野原 (ひびきののほら、現宇城市) で討たれる。

・相良 頼寛 (さがら よりひろ)
慶長 5 年 (1600) - 寛文 7 年 (1667)
人吉藩第 2 代藩主



初代藩主頼房の長男として生まれ、寛政 14 年 (1639) に起こった天草・島原の乱では、江戸へ参勤していたこともあり家臣を出陣させた。寛政 16 年、先代からの家臣犬童頼兄 (相良清兵衛) を幕府に訴え、頼兄の一族は屋敷 (お下屋敷) で藩兵と交戦し鎮圧された。(お下の乱) 寛文元年、米良 (現宮崎県) 越えにて参勤の途上、普門寺 (御假屋) に滞在した。

・相良 頼福 (さがら よりとみ)
慶安 4 年 (1651) - 享保 5 年 (1720)
人吉藩第 4 代藩主



第 2 代藩主頼寛の弟、長秀の次男として生まれ、初名は長房。第 3 代頼喬 (よりたか) の子が相次いで早世したため、元禄 3 年に頼喬の養子となり、元禄 16 年に家督を継ぐ。この頃藩内では水害への対策から財政が厳しかったが、寛文 4 年 (1664) に商人林正盛が球磨川開削工事を竣工し、元禄 9 年に第 3 代頼喬より命を受けていた藩士高橋政重が宝永 2 年 (1705) に幸野溝を完成させ、水運と新田開発が発展した。

・的場 士休（自休）（まとは しきゅう/じきゅう）

生年未詳- 寛永 18 年（1641）

八代生まれ、武将

はじめ市十郎、また彌三郎といい、のちに士休（自休）と称した。相良家の部将として第 19 代長毎（ながつね）に仕え、多くの戦功を挙げた。天正 12 年には島津義久を将とし、相良氏と共に龍造寺隆信討伐のため派兵。相良家の資料にもその戦功や硬派な人物像が記されている。町内では下鶴・落鶴開田に尽力したといわれ、寛政 2 年、子孫の信興が追遠のため下城に建墓。人吉藩校「習教館」初代教授東元堅（白髪）が撰文。



・高橋 政重（たかはし まさしげ）

慶安 3 年（1650）- 享保 11 年（1726）

武士、治水家

人吉藩士。通称七郎兵衛。第 3 代藩主頼喬に仕え、上球磨地域の灌漑用水路の開削を献策。2 度の水害を含む度重なる難工事の末、着工から 9 年を費やし、宝永 2 年球磨川の水をとりいれる水路（幸野溝）を完成させ、上球磨地域の耕作地化に大きく寄与した。



・井上 微笑（いのうえ びしょう）

慶応 3 年（1867）- 昭和 11 年（1936）

福岡県甘木市生まれ

俳 人

本名藤太郎、父の勤務の関係で本籍を人吉市に移し、湯前町役場に書記として勤務する傍ら句作に励んだ。夏目漱石を主宰に門下の寺田寅彦らが興した紫溟吟社の『銀杏』へ投句。漱石から称賛された。のちに俳句結社白扇会を主宰し『白扇会報』を発刊するなど精力的に活動し、「九州俳壇の四天王」と称された。

没後、残された稿本は球磨郡上村（現・あさぎり町）在住の郷土史家高田素次によって『井上微笑句集』としてまとめられた。

・那須 良輔 (なす りょうすけ)

大正 2 年 (1913) - 平成元年 (1989)

風刺漫画家



幼少期を湯前町で過ごし、少年時代にはすでに漫画や短歌を雑誌に投稿するなどしていた。戦中は大本营で伝単 (でんたん: 敵国の民間人、兵士の戦意喪失を目的として配布する宣伝用の印刷物) の製作を担当し、戦後は政治に対する怒りをバネに当代の政治や社会事象を痛烈に風刺する傍ら、釣りや自然をこよなく愛し、特に蛙やうなぎ、カッパを好んで描いた。里見弴や小林秀雄ら多くの文化人と交友をもった。

・北御門 二郎 (きたみかど じろう)

大正 2 年 (1913) - 平成 16 年 (2004)

トルストイ研究家・翻訳家



東京帝国大学文学部英文科に進み、トルストイ作品を読むためにロシア語の本格習得を決意して単身ハルビン (中華人民共和国黒竜江省) に渡る。

戦中の徴兵には信念に基づいて拒否。大学中退後は球磨郡水上村で農業を営みながらトルストイの研究・翻訳に傾倒する。3 部作『アンナ・カレーニナ』、『復活』、『戦争と平和』の翻訳は特に有名。

・山北 幸 (やまきた さち)

大正 2 年 (1913) - 平成 25 年 (2013)

初代下村婦人会市房漬加工組合代表



戦後の困窮する地方農村に在りながら、女性の社会的自立へ向け婦人会を発足。昭和 30 年代にすでに「食の安全安心」や「地産地消」を信念として地元の農産物を漬物に加工し販売。その取り組みや商品は注目を集め、雑誌『暮らしの手帖』で紹介され全国に広まった。平成 20 年 (2008) に代表理事を退任するまで第一線で活動した。

4 . 文化財の分布及び特徴

本町には、重要文化財の明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂をはじめとする様々な文化財が町内に所在している。

特に町の南部から西部にかけては、中・近世の堂宇や仏像彫刻があるほか、南東部には旧石器から弥生時代の埋蔵文化財包蔵地が分布している。

(1) 国指定の文化財

町内の重要文化財は 4 件で、そのうち 3 件は明導寺阿弥陀堂に関連するものである。古来、浄心寺とよばれ、木造阿弥陀如来及両脇侍像は大正 4 年(1915)に国宝指定を受けた。

また、七重石塔や九重石塔、阿弥陀堂も昭和 8 年(1933)に国宝保存法により国宝となったが、後に昭和 25 年の文化財保護法施行に伴い、国宝保存法時代の「国宝」は、文化財保護法の規定による重要文化財に指定したものとされ、明導寺阿弥陀堂関連の文化財は重要文化財となった。

木造阿弥陀如来及両脇侍像は寛喜元年(1229)の作で、手掛けた實明(じつみょう)については、その作風から慶派仏師との関連性を指摘されているほか、右脇侍(勢至菩薩)は實明とは別の仏師により造立されたといわれている。

七重・九重石塔については、願主である浄心が自身の生前供養を目的に造った逆修塔であるといわれている。



明導寺阿弥陀堂周辺



境内配置図



木造阿弥陀如来及両脇侍像

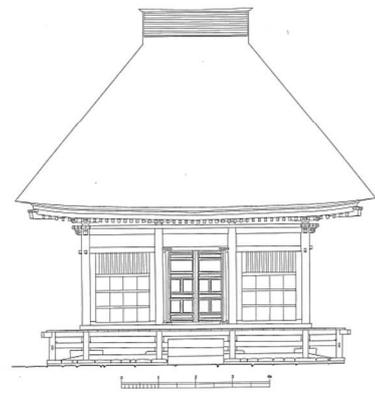


七重石塔・九重石塔ほか

八勝寺阿弥陀堂は東方北城跡の麓に西面して建ち、平成3～4年(1991～1992)に文化庁が行った「中世等文化遺産保護対策調査」によって知られるようになり、平成24年度(2012)から26年度(2014)にかけて行われた保存修理工事により、瓦葺から本来の茅葺に復原された。



八勝寺阿弥陀堂周辺



八勝寺阿弥陀堂 正面図
(『重要文化財 八勝寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』より転載)

こうした堂宇は、主に願主やその一族の繁栄を願って建立されたと考えられ、一時ではあるものの、後に相良氏の菩提寺である願成寺(人吉市)の傘下にあったことや、江戸時代に明導寺阿弥陀堂と八勝寺阿弥陀堂が地域単位の「所修理」で行われていたことから、地域全体として保護に取り組んでいたことがうかがえ、球磨地域に多くの文化財が現存する大きな要因となっている。

また、重要無形民俗文化財となっている球磨神楽は、球磨地域で古くから球磨郡にのみ伝承される神楽であり、採物舞で古風である。神楽歌には古い歌が多く、現在 17 番が伝承され、郡内の神社で舞われている。



球磨神楽（市房山神宮里宮神社）



球磨神楽（市房山神宮里宮神社）

（ 2 ） 国登録の文化財

国の登録有形文化財として、教会風の外観をもつ明導寺本堂、大正 13 年(1924)の国鉄湯前線開通時からほぼ当時の姿を残すくま川鉄道湯前駅本屋と高橋川橋梁(きょうりょう)の 3 件が選ばれている。



明導寺本堂



くま川鉄道湯前駅本屋

(3) 県・町指定の文化財

熊本県指定文化財 4 件のうち 3 件は彫刻であり、1 件は工芸(城泉寺の銅製鱧口(わにぐち))である。また、町指定文化財は 39 件で、内訳を見ると、建造物が 10 件と最も多く、彫刻 8 件、工芸 5 件と続く。

これらの多くは、御大師堂や宝陀寺観音堂、八勝寺阿弥陀堂といった社寺に関連したもので、特に八勝寺阿弥陀堂の木造天部形立像と御大師堂の木造毘沙門天立像は平安後期の作といわれており、当地でも古くから仏教文化がおこっていたことを示している。



木造阿弥陀如来及両脇侍像(県指定)



木造毘沙門天立像(町指定)

毘沙門天像は球磨地方に多く残っており、薩摩の隼人からの防御の意味で造立されたといわれている。



木造弘法大師座像及厨子・須弥壇



御大師堂 正面図
(『中世等文化遺産保護対策事業調査報告書』より転載)

湯前町内指定文化財一覧

区分		国指定	県指定	町指定	計
有形文化財	建造物	4	0	10	14
	絵画	0	0	1	1
	書跡	0	0	0	0
	典籍	0	0	0	0
	古文書	0	0	3	3
	彫刻	1	3	8	12
	工芸	0	1	5	6
	考古	0	0	0	0
	歴史資料	0	0	1	1
無形文化財		0	0	0	0
民俗文化財	有形民俗文化財	0	0	2	2
	無形民俗文化財	1	0	3	4
記念物	史跡	0	0	3	3
	名称	0	0	0	0
	天然記念物	0	0	3	3
文化的景観		0	0	0	0
伝統的建造物群		0	0	0	0
文化財の保存技術		0	0	0	0
合計		6	4	39	49

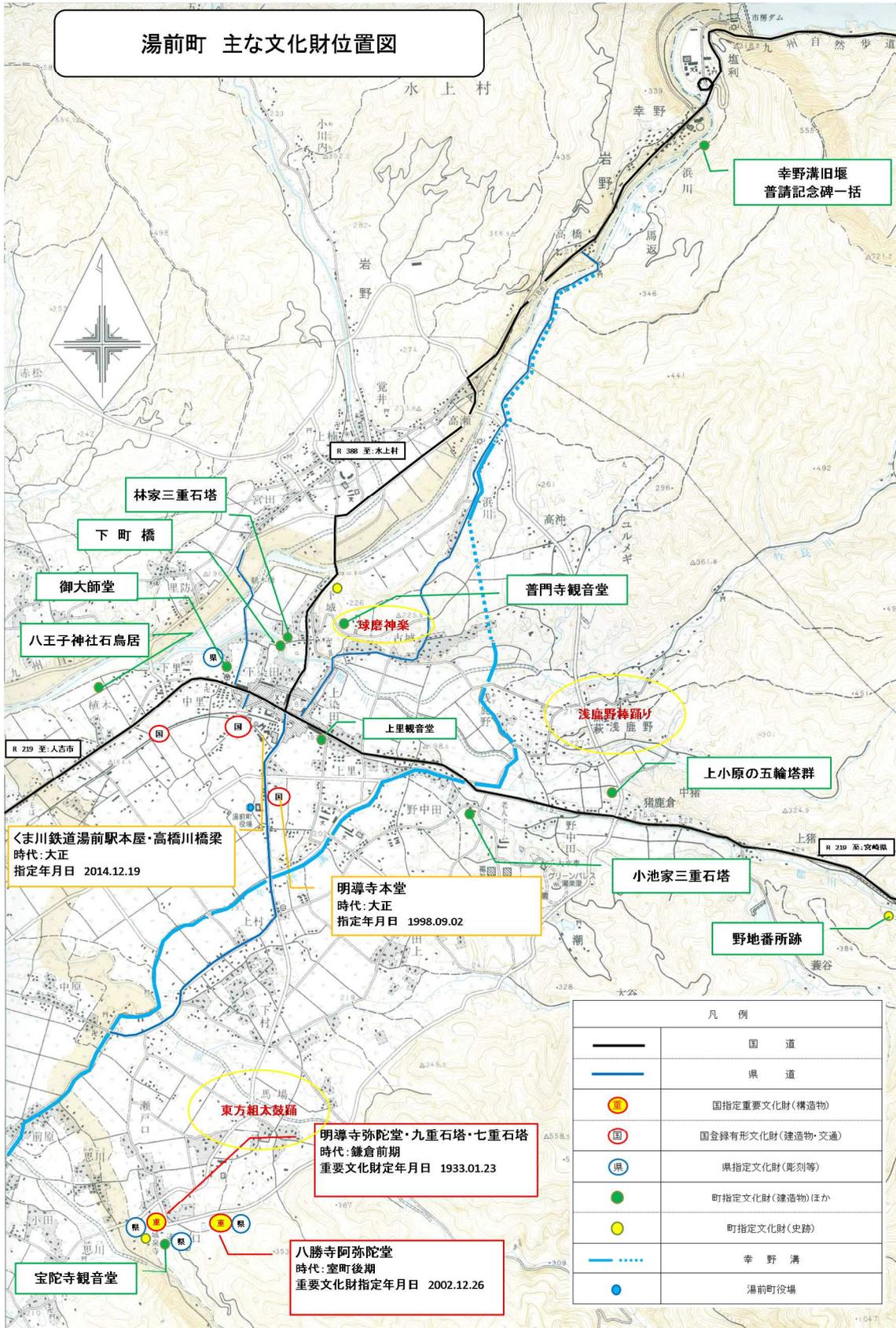
国登録有形文化財	3
合計	3

文化財内訳

No.	指定	種別	指定名称	成立年代	指定年月日	備考
1	国	建造物	明導寺阿弥陀堂	鎌倉時代	昭和8,1,23	城泉寺
2	国	建造物	明導寺(城泉寺)七重石塔	寛喜2年(1230)	昭和8,1,23	城泉寺
3	国	建造物	明導寺(城泉寺)九重石塔	寛喜2年(1230)	昭和8,1,23	城泉寺
4	国	建造物	八勝寺阿弥陀堂(附厨子)	室町時代後期(15世紀後半)(厨子は16世紀後半)	平成14,12,26	八勝寺
5	町	建造物	御大師堂	天正年間	昭和45,8,1	御大師堂
6	町	建造物	厨子及び須弥壇	天正9年(1581)	昭和54,11,26	御大師堂
7	町	建造物	普門寺観音堂	江戸時代	昭和55,8,30	普門寺
8	町	建造物	下町橋(石造橋)	明治39年(1906)、11、30	昭和55,10,28	下城区
9	町	建造物	小池家三重石塔	鎌倉後期～室町初期	昭和60,10,24	野中田一区
10	町	建造物	林家三重石塔	"	昭和60,10,24	下城区
11	町	建造物	幸野溝旧堰普請記念碑一括	江戸～明治時代	昭和63,8,25	幸野溝土地改良区
12	町	建造物	上小原の五輪塔群	大永5年(1525)～元和9年(1623)頃	平成2,8,1	上小原
13	町	建造物	宝陀寺観音堂	元禄9年(1696)	平成2,8,1	宝陀寺
14	町	建造物	八王子神社石鳥居	安永2年(1773)	平成10,5,22	八王子神社
15	国	彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍像	寛喜元年(1229)	大正4,8,10	城泉寺
16	県	彫刻	木造弘法大師坐像	応永7年(1400)	昭和40,2,25	御大師堂
17	県	彫刻	木造十一面観音立像	鎌倉後期～南北朝時代	昭和62,2,12	宝陀寺
18	県	彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍像	延徳2年(1490)	昭和63,3,15	八勝寺
19	町	彫刻	木造六観音坐像	承応3年(1654)	昭和53,5,16	普門寺
20	町	彫刻	木造地藏菩薩立像	室町時代	平成2,8,1	宝陀寺
21	町	彫刻	木造薬師如来立像	南北朝～室町初期	平成2,8,1	八勝寺
22	町	彫刻	木造天部形立像	鎌倉時代	平成2,8,1	八勝寺
23	町	彫刻	木造毘沙門天立像他一括	平安～桃山時代	平成2,8,1	御大師堂
24	町	彫刻	木造男神坐像	応仁元年(1467)	平成2,8,1	永岡大王神社
25	町	彫刻	木造男神像	江戸時代	平成2,8,1	永岡大王神社
26	町	彫刻	木造聖観音立像	室町時代後期	平成13,5,24	上里の観音堂
27	町	絵画	板絵著色神像	天正3年(1575)	昭和55,10,28	御大師堂
28	県	工芸	銅製鱈口	天授7年(1381)	昭和54,11,16	城泉寺
29	町	工芸	鉄製鱈口	安永3年(1774)	昭和55,10,28	宝陀寺
30	町	工芸	鉄製鱈口	文明年間	平成2,8,1	八勝寺
31	町	工芸	厨子	承応3年(1654)	昭和53,5,16	普門寺
32	町	工芸	祈祷札	"	昭和53,5,16	普門寺
33	町	工芸	里宮の手水鉢(手洗石)	享保8年(1724)	昭和55,10,28	里宮神社
34	町	古文書	求磨外史	弘化4年(1847)頃	昭和63,8,25	下里区
35	町	古文書	探源記	享保以前成立の写本	昭和63,8,25	下里区
36	町	古文書	田代家文書	江戸末期頃	昭和63,8,25	下里区
37	町	歴史資料	肥後国図	江戸中期	平成10,5,21	教育委員会
38	町	有形民俗文化財	永岡の猿田彦大神	宝永6年(1709)	平成10,5,21	浜川区
39	町	有形民俗文化財	平野の庚申塔	元禄6年(1693)	昭和44,8,1	馬場区

文化財内訳

No.	指定	種別	指定名称	成立年代	指定年月日	備考
40	国	無形民俗文化財	球磨神楽	室町時代	平成25, 3, 12	里宮神社
41	町	無形民俗文化財	東方組太鼓踊り	江戸時代	平成25, 3, 12	同保存会
42	町	無形民俗文化財	浅鹿野棒踊り	江戸時代	平成25, 3, 12	同保存会
43	町	無形民俗文化財	球磨拳		昭和58, 3, 15	
44	町	天然記念物	権現やばの高野槇		昭和45, 8, 1	湯前町
45	町	天然記念物	毘沙門の大檜		昭和45, 8, 1	上村区
46	町	天然記念物	蛇ん谷低層湿原群落		昭和61, 1, 23	田上区
47	町	史跡	古塔碑群	鎌倉～江戸時代	昭和54, 2, 16	城泉寺
48	町	史跡	的場士休(自休)の墓	寛政2年(1790)	平成24, 2, 22	下城区
49	町	史跡	野地番所跡	江戸時代	平成24, 6, 27	猪鹿倉山
51	国登録	有形文化財	明導寺本堂	大正15年(1925)	平成10, 9, 25	明導寺
52	国登録	有形文化財	くま川鉄道高橋川橋梁	大正13年(1923)	平成26, 12, 19	くま川鉄道株式会社
53	国登録	有形文化財	くま川鉄道湯前駅本屋	大正13年(1923)	平成26, 12, 19	くま川鉄道株式会社



(4) 地域で行われている伝統的行事と未指定文化財等

本町の行政区は、平成 28 年 9 月末現在で 23 地区となっており、その下部組織として 26 の公民分館が置かれ、さらに数軒から 10 軒前後がまとまる隣保班と呼ばれる自治組織がある。

本町の地区割りには、現在は大字を冠していないが、明治期の公文書に「湯前村東（または西）・・・番地」と記されたものがあり、牧良川と幸野溝を結ぶ線で大きく東と西に分けられていた。

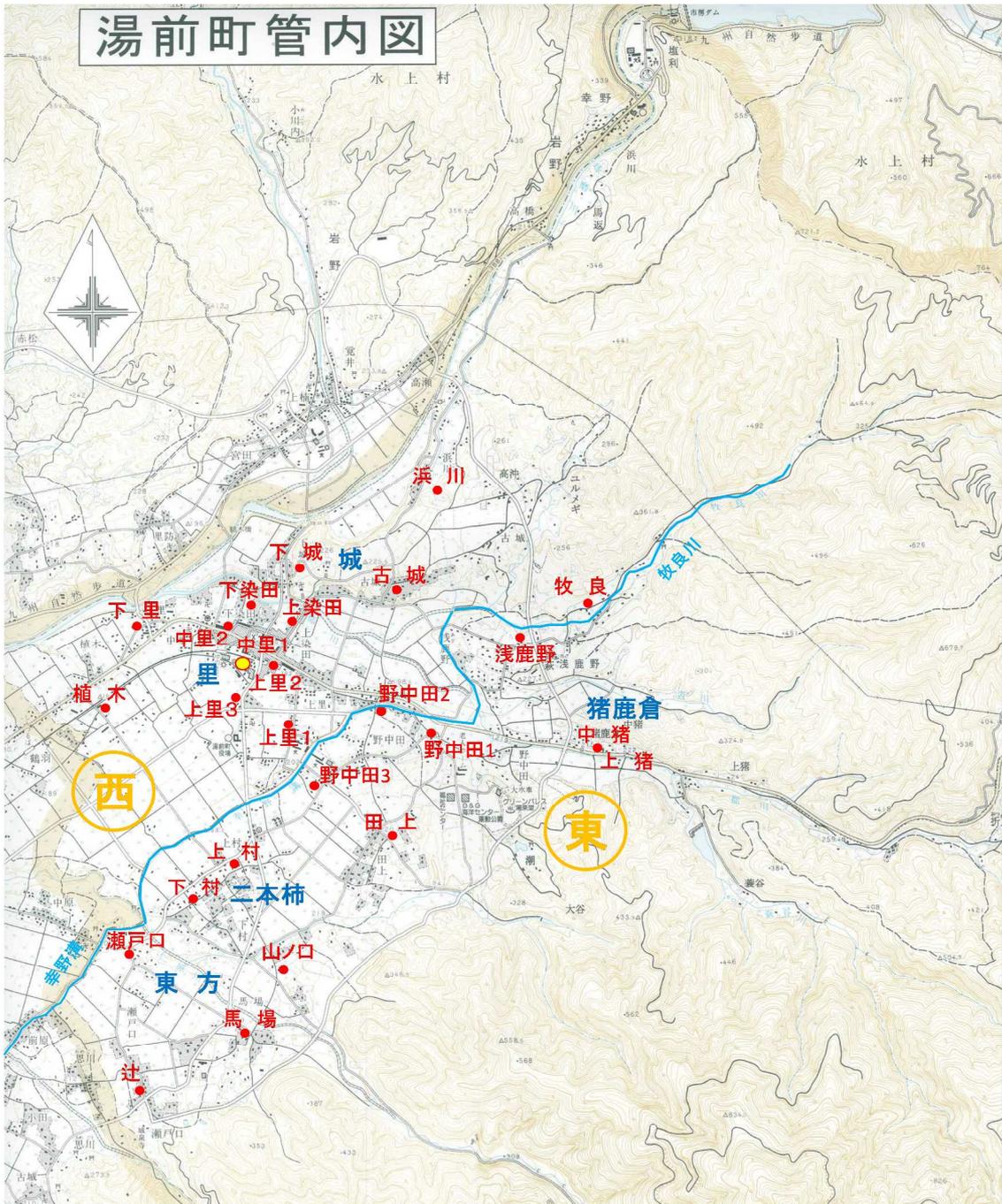
また、明治 10 年（1921）頃まで使われていた名寄帳では、城、猪鹿倉、二本柿の名称でくくられており、城や里といった文字が現在の行政区名にも受け継がれている。

地区割りと住民数

地区名	公民分館名	隣保班数	世帯数	住民数			旧名寄帳の集落割	左記区分の集落人口
				男	女	計		
浜川	浜川	7	38	53	66	119	城	711
下城	下城	3	39	59	57	116		
古城	古城	6	73	93	114	207		
上染田	上染田	5	47	52	58	110		
下染田	下染田	6	61	71	88	159		
上里1	上里1	9	80	99	132	231	里	1,168
上里2	上里2	3	35	29	46	75		
上里3	上里3	10	106	140	156	296		
中里1	中里1	2	24	26	37	63		
中里2	中里2	10	78	75	109	184		
下里	下里	4	70	82	99	181		
植木	植木	5	50	68	70	138	猪鹿倉	419
浅鹿野	浅鹿野 牧良	13	91	109	124	233		
上猪	上猪	5	15	10	12	22		
中猪	中猪	8	66	80	84	164	野中田	566
野中田1	野中田1	7	64	80	86	166		
野中田2	野中田2	5	60	63	75	138		
野中田3	野中田3	13	115	128	134	262	二本柿	728
田上	田上	10	82	109	124	233		
上村	上村	11	110	129	134	263		
下村	下村	12	93	110	122	232	東方	423
馬場	馬場 山口	14	91	130	122	252		
瀬戸口	瀬戸口 辻	6	60	80	91	171		
計		174	1,548	1,875	2,140	4,015		4,015
特別養護老人ホーム			87	27	60	87		
合計			1,635	1,902	2,200	4,102		

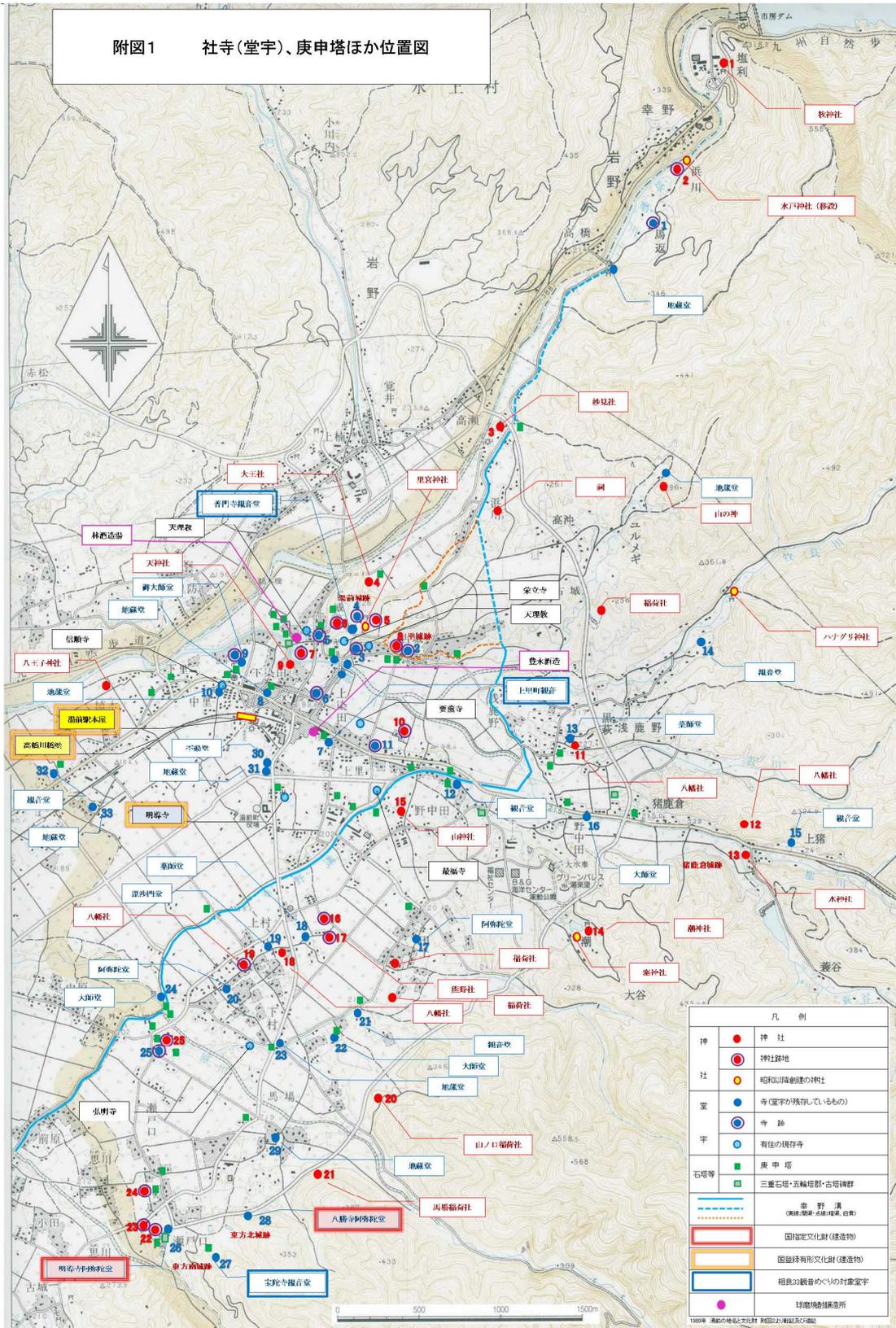
上表の「旧名寄帳の集落割」の欄において、旧名寄帳は、城・猪鹿倉・二本柿の3冊が残っており、里・東方は『湯前の地名と文化財』より引用し、野中田は追加した名称である。

地区名と公民分館位置図



昭和 63 年（1988）から平成元年（1989）にかけて行われた『湯前の地名と文化財』刊行に伴う調査によると、町内には跡地も含め 25 箇所の神社、33 箇所の堂宇、庚申塔（こうしんとう）など 47 箇所の石塔類があり、これらのほとんどは、地区や公民分館、あるいは隣保班といった単位で管理がなされている。

附図1 社寺(堂宇)、庚申塔ほか位置図



『湯前の地名と文化財』の社寺(堂宇)位置図に昭和期以降創建の社寺等を追加している

神社名称

番号	神社名称	所在小字名
1	牧 神 社	塩 利
2	水 神 社 跡	馬 返
3	妙 見 社	下川久保(浜川神社)
4	大 王 社	下永岡(永岡神社)
5	市房神宮 遥拜所跡	野 首
6	若 宮 社 跡	下 城
7	権 現 社 跡	下 城
8	年 神 社 跡	加古井
9	天 神 社	下染田
10	八 坂 社 跡	後 村
11	八 幡 社	上ノ段
12	八 幡 社	猪鹿倉山
13	水 神 社	桑津留(水神社)
14	潮 神 社	潮 山
15	山 神 社	上元町
16	天 神 社 跡	平 榎
17	熊 野 社	平 榎
18	八 幡 社	中 村
19	八 幡 社	下 村
20	稲 荷 社	仁 原
21	稲 荷 社	長谷場
22	熊 野 社 跡	下 辻
23	熊 野 社 跡	下 辻
24	八 幡 社 跡	水ノ手
25	八 尾 神 社 跡	下柿木

堂宇名称

番号	堂宇名称	所在小字名	番号	堂宇名称	所在小字名
1	地 蔵 堂 跡	馬 返	18	薬 師 堂	平 榎
2	西光寺 阿弥陀堂跡	加古井	19	毘 沙 門 堂	中 村
3	運 泉 寺 跡	加古井	20	阿 弥 陀 堂	下 村
4	普 門 寺 跡	野 首	21	観 音 堂	下山ノ口
5	地 蔵 堂 跡	下 城	22	大 師 堂	下山ノ口
6	毘 沙 門 堂 跡	下染田	23	地 蔵 堂	野畑
7	観 音 堂	老 神	24	大 師 堂	掛端
8	地 蔵 堂	大 塚	25	薬 師 堂 跡	下柿木
9	吉 祥 院 跡	後 原	26	浄 心 寺	下 辻
10	地 蔵 堂	下牧原	27	宝 陀 寺	上 辻
11	宝 泉 院 跡	嶽ノ下	28	八 勝 寺	平野
12	観 音 堂	野中田	29	地 蔵 堂	下馬場
13	薬 師 堂	上ノ段	30	不 動 堂	買元
14	観 音 堂	北牧良	31	地 蔵 堂	買元
15	観 音 堂	七ツ山	32	観 音 堂	下松下
16	大 師 堂	下仁良田	33	地 蔵 堂	植木(多良木)
17	阿 弥 陀 堂	田 上			

石塔類名称

番号	名称	番号	名称	番号	名称	番号	名称
1	猿田彦碑	16	庚申塔	31	地藏碑	46	念仏碑
2	猿田彦碑	17	地藏碑	32	庚申塔	47	庚申塔
3	念仏碑	18	庚申塔	33	庚申塔		
4	庚申塔	19	青面金剛塔	34	庚申塔		
5	庚申塔	20	庚申塔	35	庚申塔		
6	庚申塔	21	庚申塔	36	地藏碑		
7	青面金剛塔	22	庚申塔	37	庚申塔		
8	庚申塔	23	庚申塔	38	庚申塔		
9	庚申塔	24	庚申塔	39	地藏碑		
10	庚申塔	25	庚申塔	40	庚申塔		
11	念仏碑	26	庚申塔	41	庚申塔		
12	庚申塔	27	禅休碑	42	庚申塔		
13	念仏碑	28	庚申塔	43	庚申塔		
14	庚申塔	29	安心碑	44	地藏碑		
15	地藏碑	30	庚申塔	45	庚申塔		

庚申塔は、庚申（かのえさる）の日に夜を徹して行う庚申信仰の供養石塔として、人吉球磨地域の各地に点在しており、本町内では1646～1800年代までのものが点在している。



庚申塔（町指定文化財）
（永岡の猿田彦大神）1709年



庚申塔（未指定）
（辻公民館近く）1725年



庚申塔（未指定）
（浜川地区）明治期

集落で行われている伝統的行事としては、潮神社（野中田区）の川祭や毘沙門堂（上村区）の花祭など、その集落にある歴史的な社寺等に関連した特有の祭事と、地蔵祭や十五夜祭など複数集落で同様の祭事が行われるものがある。

また、多くの集落で行われている祈祷時¹、鐘の織²、御伊勢講³といった行事は、社寺や公民分館へ地域の人々が集い、季節毎の集落行事や日常生活に関わる語らいの場ともなっており、これらの行事には直会（なおらい）⁴と呼ばれる球磨焼酎の酌み交わしを代表とした飲食を共にする場面がつきものとなっている。



潮神社の祭礼



上村区の花祭

1 祈祷時（きとうどき：祈祷祭ともいわれる）

集落内の安全祈願、五穀豊穰等の願いを込めて、神仏の区別なく祭礼として行われていることが多い。

2 鐘の織（かねのおり：みす織とも呼ばれる）

集落内の女性が集い、奉納用の旗を織っていたものが語源と考えられ、奉納された旗はお堂の鐘紐とされることもある。現在は単に茶話会となっていることが多い。
全国的には「鐘の緒織」と呼ばれることが多い。

3 御伊勢講（おいせこう）

江戸時代に起こった伊勢神宮への集団参詣のための路銀制が語源と考えられ、集落内の安全祈願として神事が行われていることが多い。

4 直会（なおらい）

一般的には神事に関する共飲共食儀礼とされるが、当地域では、神仏・行事の区別なく広義に共飲共食を指す。

地域の伝統的行事一覧

公民分館名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
城	浜川	水戸神社祭			浜川地蔵祭 馬返地蔵祭	鐘の織	十五夜祭		妙見社例祭 大王社例祭	安牧神社大祭		
	下城	的場土休憩堂祭				火の祈禱 鐘の織 普門寺開帳						火の祈禱 普門寺開帳
	古城						鐘の織 月見会	地蔵祭			地蔵祭	
	上染田				地蔵盆							
	下染田					天神祭	十五夜祭					
里	上里1						十五夜祭 観音堂開帳					観音堂開帳
	上里2			無縁仏堂祭			鐘の織 火の祈禱					
	上里3				不動尊 地蔵祭							火の祈禱
	中里1											
	中里2				地蔵祭		観月祭 鐘の織					鐘の織
	下里				地蔵祭	鐘の織	御大師堂法要 御伊勢講 鐘の織				御伊勢講 稲荷祭	御大師堂法要
	植木				祈禱時	鐘の織	十五夜祭 八王子神社使申			八王子神社大祭		
猪鹿倉	浅鹿野						秋祈禱					春祈禱
	牧良		御伊勢講		さなぼり	鐘の織	秋祈禱 御伊勢講		牧良神社大祭 ハナグリ神社大祭	御伊勢講		春祈禱
	上猪											
	中猪						鐘の織 十五夜祭			火の神祭		
野中田	野中田1	潮神社例祭			観音祭				潮神社例祭			
	野中田2	潮神社例祭	御伊勢講		阿弥陀祭 地蔵祭		御伊勢講 潮神社例祭		潮神社例祭	御伊勢講		
	野中田3	潮神社例祭 おっばい祭				鐘の織	鐘の織 潮神社例祭		山の神祭 潮神社大祭			
二本柿	田上	お釈迦祭			阿弥陀祭 鐘の織							初午祭
	上村	花祭			毘沙門祭 薬師堂ゴヤ	鐘の織 御伊勢講 春日講				御伊勢講		涅槃会法要
	下村					下村阿弥陀 子ども神輿	みす織					
東方	馬場			水口参り さなぼり	八勝寺例祭	鐘の織	八勝寺例祭 御伊勢講 十五夜祭	水口御礼参		八勝寺例祭	御伊勢講	八勝寺例祭
	山口	稲荷神社祭 御大師例祭			祈禱時 さなぼり		鐘の織 稲荷秋大祭 御伊勢講	祈禱時	稲荷初午祭			稲荷神社祭
	瀬戸口			祈禱時	薬師接待 祇園接待 ヤツノ様		鐘の織 十五夜祭				稲荷初詣 御伊勢講	稲荷初午祭
	辻			祈禱祭			城泉寺法要 宝陀寺開帳 十五夜祭					城泉寺開帳 宝陀寺開帳 東方稲基地堂祭

市房山神宮里宮神社・栄立寺・天理教会に関する祭礼行事の記載は行っていない

稲荷神社

稲荷信仰は、穀物や農業の神といった面が色濃いこともあり、町内には山ノ口稲荷、田上稲荷、下里稲荷などの稲荷神社があり、山口地区では、稲荷初詣と初午祭、田上地区では初午祭、下里地区では単に稲荷祭と呼ばれ、集落行事としての祭儀が行われている。



山口稲荷神社



田上稲荷神社

また、山口稲荷は山の中腹に位置し参道もあるが、田上稲荷は民家のすぐ隣に建っており、下里稲荷は弘法大師を祀る御大師堂の隣にあり、様々な態様となっている。



下里稲荷神社



下里稲荷神社

潮 神 社

潮神社は町中央部の野中田区に位置する神社であり、主神はウガヤフキアエズノミコトで、宮崎県の鵜戸神宮と同一である。

社殿の改築は 100 年に 1 度行われており、明治期の改築に於ける寄付者の名前を見ると、町内に限らずひろく球磨の一円に知られていたことがうかがえる。

古来よりお乳を模した作り物（お供え物）を作って参拝すると、お乳の出が良くなるといわれている。

社殿の周囲には樹齢 100 年を超えるクスやスギの巨木がそびえ立ち、その脇に潮溜池（かんがい用の人工池）があり、神社を訪れる人々の憩いの場ともなっている。

また、この一帯は、明治頃まで沼地で、いかなる干ばつに見舞われても濡れたままの岩があったといわれており、ある日荒天であった翌朝、その岩が忽然と姿を消していたという伝説がある。（沼地で地盤が脆弱であったため、大雨で地中に沈んだともいわれている。）

この付近には「潮山」という地名があり、湧き水に微量の塩分が含まれていることに由来するもので、山の中で塩が出ると大変珍しがられたそうである。

また、潮溜池にはかつて鉱泉があり、明治の頃まで湯治場として栄えていたといわれ、平成に入ると「ゆのまえ温泉湯楽里」が整備され、山中に湧く塩湯を目当てに訪れる人も多い。

現在は、地元の野中田地区が中心となって管理をしており、毎年 4 月 8 日に水への感謝と水難防止を祈願する「川祭り」、12 月 8 日には五穀豊穡の「感謝祭」を行っている。この感謝祭では、戦前には芝居小屋が立ち、相撲大会も行われていたが、平成には姿を変え、毎年 4 月頃に「湯前潮おっばい祭り」という潮神社に因んだ催しを地元有志により実施している。



潮神社(外観)



潮神社(内部)

野中田山神社（山の神）

町内では、稲荷神社と同様に各地に山の神が祀っており、旧暦の正月、5月、9月に林業関係者等が神事を行い、一般的には山の神が女性神であるため、男性のみの参列となっている。

この野中田山神社では、女性だけが参列する山の神祭が毎年12月13日に行われている。野中田地区内の元町集落で、女性の重病や早世が多く発生し、それを鎮めるために、女性の神である山の神を祀ったことが起源であるとされている。『湯前の地名と文化財』によると、明治22年（1889）に潮神社へ合併（『沿革史』）とされているが、平成に入り元の場所へ戻されたと考えられる。



野中田山神社

安牧神社

水上村との町村界付近に位置する安牧（やすまき）神社は、江戸時代後期に建てられ、牛馬の守り神として広く知られており、例大祭の行われる毎年12月1日には、地域内外から多くの農業関係者が訪れる。

この安牧神社では、かつて球磨神楽が舞われていたが、現在は踊り手の不足などから神楽は行われていない。例大祭の神事では、牛馬を引き連れての参拝が一般的であったが、昭和30年代以降より牛馬を伴うことは殆どなくなってきた。近年は、熊本県立南陵高校（あさぎり町）生徒等による牛を引き連れての参拝や、境内の清掃作業が行われるようになっている。



安牧神社



南陵高校生徒による参拝

妙見社

妙見社は、水上村との町村界に位置する浜川地区の球磨川の沿岸に位置し、創建時期は不明となっているが、大正年間（1912～1926）の銘がある堂内の神像は、疱瘡の神様といわれている。



妙見社

大王神社(永岡の大王神社)

大王神社は、『神社記』によると、永正2年(1505)に再興されたといわれており、蛇の神様（通称「じゃおうさん」）を祀っている。

堂内の木造男神坐像(町有形文化財)は応仁元年(1467)の銘があり、天台系仏師として活躍した慧麟(えりん)の作であることが分かっている。

堂宇は天和年間に修造、元禄3年(1690)に造替をそれぞれ行っており、旧暦11月25日に神社周辺の人びとが集まって祭事を行っている。



永岡の大王神社

八王子神社

近江国坂本八王子神社と同体の祭神が祀られており、祭事は、毎年旧暦10月15日に行われ、小川を跨いで建てられた本殿と東側に位置する石製の鳥居が特徴的である。この石鳥居は、安永2年(1773)正月に再建された事を示す銘があり、町内に残る唯一の江戸時代からの鳥居で、町指定の文化財となっている。



八王子神社



八王子神社石鳥居

日本遺産認定の概要

本町の位置する球磨盆地は、国宝青井阿蘇神社で知られる人吉市をはじめ 1 市 9 町村で構成され、鎌倉時代から明治維新までの約 700 年間にわたり、相良氏が統治を行っていた。

相良氏は、民俗芸能や球磨焼酎など民衆の文化を尊重しつつ、寺社に都の建築様式を用いるなどの新たな技術も取り入れ、歴史・文化的価値が高い寺社や仏像が信仰の対象として現在も受け継がれている。

この「相良 700 年」に受け継がれた文化財や風習、地域の歴史によって紡(つむ)がれた物語が、日本の文化・伝統の魅力を伝えるものとして、全国 17 地域(平成 27 年 4 月認定時)とともに認定されている。

認定地域名称：人吉球磨
認定年月日：平成 27 年 4 月 24 日
構成文化財数：41 件

認定されたストーリー

「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化」 ～日本でもっとも豊かな隠れ里 - 人吉球磨～

人吉球磨の領主相良氏は、急峻(きゅうしゅん)な九州山地に囲まれた地の利を生かして外敵の侵入を拒み、日本史上稀な「相良 700 年」と称される長きにわたる統治を行った。

その中で領主から民衆までが一体となったまちづくりの精神が形成され、社寺や仏像群、神楽等をともに信仰し、楽しみ、守る文化が育まれた。同時に進取の精神をもってしたたかに外来の文化を吸収し、独自の食文化や遊戯、交通網が整えられた。

保守と進取、双方の精神から昇華された文化の証が集中して現存している地域は他になく、日本文化の縮図を今に見ることができる地域であり、司馬遼太郎はこの地を「日本でもっとも豊かな隠れ里」と記している。

- ・ 湯前町に位置する認定日本遺産の構成文化財
明導寺阿弥陀堂(城泉寺)、御大師堂
- ・ 複数市町村にまたがり本町と関連の認定日本遺産の構成文化財
球磨神楽、球磨焼酎、百太郎溝と幸野溝、相良三十三観音巡り
人吉球磨の民謡、臼太鼓踊り、庚申塔と庚申信仰、球磨拳

湯前町の特産物と伝統食

湯前町の特産品

農産物として、ぶどう、いちご、メロンなどの生産が盛んである。特にぶどうについては、小規模の生産ながら気候条件に恵まれ、糖度が高くみずみずしいと評判で「湯前ぶどう」としての地位を確立しつつある。

下村婦人会の「市房漬」(いちふさづけ)は、60年以上前に地域の婦人たちが集まって立ち上げられ、添加物を一切使わず手間ひまかけて作られる手法は今も変わっていない。地元で採れた野菜に手を加え、付加価値を付けて提供する六次化産業のさきがけでもある。

現在は、20種類以上の製品を生産・販売しているが、なかでも「市房漬」と「きりしぐれ」は秘伝の製法や原料へのこだわりが認められ、(財)食品産業センターの「本場の本物」に熊本県内で唯一認定されている。

伝 統 食

「骨かじり」

豚(もともとは猪)を解体した後、骨に残った肉を食べるおもてなし料理で骨に直接かじりついて食べる姿から「骨かじり」という名前がついた。

以前は、猟師が猪を捕獲した際に行われていたが、現在は精肉店で豚の骨を購入し、大勢の来客や宴会などの際に家庭で行われている。

調理方法はいたってシンプルで、大鍋に水を張り、骨を入れて2~3時間、アクを取りながら煮込み、最後に塩で味付けしたら完成するものである。



湯前ぶどう



下村婦人会の漬物等



骨かじり